

## 都市語りの可能性

— 第六八回研究例会を巡って —

学会研究例会が楽しいなんて！

「この楽しさは何でしょう」大島建彦先生がおっしゃった。

「都市語りの可能性——『東京八重山郷友連合会』『東京八重山郷友会』の伝承活動について——」の研究例会終盤に会員の感想や意見を伺ったが、学会成立以来の重鎮・大島建彦先生が当日解説と総括、案内役を引き受けて下さった沖縄国際大学狩俣恵一教授の指名を受けて発言された。同じ想いは会場にも満ちていた様子で拍手も聞こえた。学会の研究例会が楽しいなんて！私自身も初めての体験であった。企画した研究例会委員としては会場での盛り上がり、久しぶりに口承文芸学会会員と共通の課題を見つめたような興奮を味わった。学問が細分化して個別的で鋭角的な表情をもつ近年の研究傾向に対して、学会が丸ごと関わるかもしれない未分化な研究領域が仄見えた素朴な期待感も湧きあがってくる。その研究領域が「都市語り」で

野村 敬子

あった。従前の研究が見落したと言うより見ようとしなかった動態の研究である。都市という「怪談や伝説の根も葉もない」言語活動が浮遊させられて、仮想都市的な印象で遊ばれてきたが、その都市にも都市ならではの個性的な口承文芸・歌や語りが息付いて根も葉も茂らせている。そこでは世代を継いでの伝承活動がみられる。故郷を出た人々が都市社会で再構成した団体に所属し、かつての土地言葉で歌い・踊り、語るものである。その伝承行動は都市滞在、都市在住の行動様式として特徴的なものである。共通語、標準語など都市に行き渡る言葉を基準にした世界とは異質の口承文芸世界がある。特に近年その傾向が多いように見受けられるが、首都圏の東北出身団体の一つなどは「長年冷凍保存してきた言葉を解凍する」と、現代の故郷言葉とは異なるであろう、出郷当時の語り言葉へのこだわりを示している。地域文化の表徴としての言葉を口承文芸や芸能によって首都圏で継承して行く活動は、南島の郷友会活動において顕著な事例を見ることが出来る。六八回研究例会では首都圏在住の八重山出身者のご理解ご協力を

頂いて、「やいま―世界」を体感させて頂いた。

その契機となったのは本学会理事選挙であった。前年度日本口承文芸学会理事会で理事選挙についての報告がなされたが、選挙管理委員会から会員と理事の比例数について勧告を受けた。それは政治的選挙でいうところの一票の格差の発想と聞いた。特に沖縄・九州地区のバランスを問題視した議論で、格差の視点で言うならば会員の少ない沖縄を含む九州は現状の半減にしても不思議ではなからうという議題であった。果たして、そうであろうか。幸い理事会の協議ではむしろ総体の数を増やす必要を提案して、その案件は学際的な決着をみたのであった。此の時、例会当番の私は学問へのまなざしの問題として八重山文化を継承する郷友会と共催の研究例会を発想した。

口承文芸学は声を発し、聴く、視る、感じる、この身体感覚抜きに研究が考えにくい。会場の「この楽しさは何でしょう」の極まるところは都市における八重山文化を聴く、視る、感じる場の意外性と身体感覚にあつたのではないか。加えて「東京八重山連合会」「東京竹富郷友会」共催で会員の方々の参加で、親島とは一味違う都市固有の継承とそれを享受共感する八重山出身者の姿を認識するところともなった。また口承文芸研究と実践の東京「聴き耳の会」も共催で、会場整理や進行(津田尚子氏)を手掛けた事情もあつて従前の形とは何やら異なる、学会以外の都市口承文芸活動という未生のテーマへの覚醒も囿られたのかもしれない。例会の進路に従いながら以下振り返りつつ記してみたい。

## 「東京郷友会」という思想

一年前であったが、第八九回「東京竹富郷友会総会」に参加して沖縄国際大学狩俣恵一教授と話し合った。狩俣教授の働きかけで「東京竹富郷友会」「東京八重山郷友会」が研究例会と共催の形で協力して下さる次第となった。研究例会当日も狩俣教授は宜野湾市から駆け付けて、八重山芸能や口承文芸それぞれの解説、総括「東京における八重山伝承の今日的意義」を引き受けて頂いた。その熱意に感謝申し上げる。

東京渋谷の國學院大學を会場に行われた六八回研究例会では久野マリ子國學院大學教授の「ウチナーグチから見える文化・社会」の講演をお願いした。久野マリ子教授は「國學院雑誌」に「インヌ パーヌ ヌム(犬の歯の蚤)」など琉球の諺を挙げておられるように、ウチナーグチをめぐる沖縄各島の研究を重ねておられる。「日本語は全部方言」と沖縄各島の言葉の特徴を解析してくださった。「帰りましようね」「行きましようね」と言っただけで行ってしまう沖縄表現には満場が笑った。沖縄に多い格言などを紹介しつつ、扇の各地域ウチナーグチの違いなど、その文化的位相について綿密な探訪の成果をお示しくくださった。言葉をめぐる問題は難しい。しかし口承文芸の研究はその問題抜きに進むことは叶わない。講演仮題に方言と書いたところ、狩俣教授にシマクチを方言とは認識しない琉球独自の

言葉と注意された。「方言札」で屈辱を味わったシマクチとして独自文化の保存継承する運動の在り方からも、言葉をめぐる問題は熱い今日の重要課題である。講演で歴史的な「方言札」にも触れられたが、時間的な制約で終わられて余韻を残された。「方言札」の歴史的瑕疵は各自口承文芸研究の中に問うて行くための重い余韻として受け止めた。

その後、根岸英之・飯倉義之両会員が聴き役で、瀬戸克氏・富野芳江氏・前新三三四氏（東京竹富郷友会）仲本学氏（東京沖繩県人会）の竹富島での思い出や東京暮らし「東京郷友会」について自由な「口語り」を伺った。在京歴の長い瀬戸克氏は郷友会の存在そのものを証す想いを言葉にされた。皆より早い時代に上京されたが「郷友会」の精神的な支えについて語られた。会員が仕事や心配事の相談にのってくれたので東京暮らしが続けられた」という。「うつぐみの心」は皆に共通していた。最も若い世代の仲本学氏が、子ども時代上京して学校で「君が代」を歌えず、口ばくで乗り切ったという体験談は、沖繩県の太平洋戦争後の暮らしを語る優れた切り口であった。文部省の方言札による共通語強制教育の次の、アメリカによる沖繩教育への干渉には思考を揺すぶられたが、形式に関わらない「口語り」は可能性を秘めているようだ。孫を連れて竹富から帰ったばかりという富野芳江さんの故郷を語る言葉は熱かった。首都圏在住者としての「親島竹富へ通う想いの熱さ」が当日のキーワードであったが、祭りの拘束など島の信仰と関わらない自覚的芸

能の継承が郷友会の特徴と見受けられた。

郷友会組織については「たけとみ」VOL52に活動記録があるが「東京竹富郷友会」の外に八重山芸能の保存継承に関わる会、八重山親善スポーツの会などの全体行事の他に西表、波照間、白保、黒島、与那国、大浜、石垣など各島東京郷友会の存在が知られる。

昭和十三年生まれで、昭和三十三年上京の前新三三四氏に伺うところでは「東京竹富郷友会」は「石垣竹富郷友会」「沖繩竹富郷友会」と共に活動する当初、生活相互扶助的な共同体意識を持つ組織であったように見える。その意識が次第に伝統行事の継承実践へと向かい今日に至っている。石原昌家氏は「疑似共同体社会としての郷友会組織」と表現している。「東京竹富郷友会」は今年九十周年を迎えるが最初は「嘉利勇士会」という名前で大正四年上京した人（迎里文男・崎山毅・高嶺繁夫・榎原宇謝各氏）が寄り合った「島の文化を学びながらともに生きる」という会であったという。「郷友クラブ」と名前を変えたこともあったらしい。キーワードは「うつぐみの心」で、それは時代を通底する八重山魂という。

前新三三四氏は第二次世界大戦中の竹富で、家畜がみんな兵隊に供出させられた記憶があるという。ある日、山羊、牛など持っていかれたので、自分の家の小さな子豚をとっておいて祖父が油味噌にした。兵隊が怒って祖父を制裁、ひどく叩かれた。敵の飛行機が海に墜落して外国人兵士が捕虜となった。椅子に

縛られていたのを遠方からみた。戦争後は軍隊の弾薬庫に信管を抜かない爆弾がたくさん残っていた。子どもたちがいじって遊んでいたところ爆発した。大人でも爆発で怪我をした人もいた。大人たちが竹富の島の周りにぐるっと残りの爆弾類を埋めて敵が上陸したら爆発するようにという発想であったという。今もそのまま埋めてあるので心配だとも語っている。

前新二三四氏は益子焼の職人になろうと思つて上京した。當時は石垣から素朴な焼き物を買つていた。竹富に焼き物をする技術があれば皿小鉢を買わずに済むのではと、柔らかな益子焼きの技術に憧れた。そして兄と百姓をしていたのをやめて昭和三十三年に船で東京晴海埠頭へ。それ以前の人は船で沖繩、海上を鹿児島に渡つて国鉄に乗つた。バスボートの必要なドルの時代で上陸手続も面倒で、日本本土への道は遠かつた。上京の三日後に神宮外苑あたりで皇太子、美智子妃の御婚禮の馬車を拝見した。朝早く、人が並んでいるので自分もそこに居たら、すぐ目の前をお通りになつた。それにしても、この大勢の人は、とても自分はこの東京には暮らせない。知り合いも少ない。世話をしてくれたのは台湾で産婆をしていた伯母（東京でコピーやウイスキーアメリカ煙草などの土産物屋）の知人に連れられて益子焼きの田村耕一先生のところに出向く筈が、自分は芸術家向きではないと言われた。竹富で作る井茶碗、焼き物を目指したのであるから当然。もう竹富に帰るしかないが、牛も畑も売つてきたので困つた。と、思つたところ、「郷友会」の人が

仕事を世話してくれた。そして電気工事の仕事を覚えて生涯の仕事となつた。「郷友会」の方々の存在は大きい。東京という処は他所から来た人をなかなか受け入れない。三十三歳になつていたので見習い一年で仕事を覚え、東海無線の夜学に行くよう指導してくれた。「郷友会」に行くど竹富と同じ気持ちになつている。芸能は楽しみみの為、ウタキや祭りとは関係なくやつている。弟は二年後に上京したがブラジル移民まで考えていたようだった。島に戻れない人には郷友会は楽しい。今は敬老会に行く。今年は「東京竹富郷友会 創立九十周年記念公演 ゆーばなうれ」が大々的に行われると皆さんと楽しみにしている。

長く続いたこの絆の在り方は上京組を容易に受け入れない都市・東京なればこその特徴であろう。疑似共同体と呼ばれない都の堅い結束ではある。地縁や宗教に関わらず、二世、三世世代のように現実的な竹富とも関係を持たずとも、人間関係だけで結ばれる郷友会は疑似共同体というより、琉球を壊滅させた失敗を知る現代日本の首都東京で、底光りする八重山精神集合体のように見える。柳田國男は『明治大正史』に雑誌「国民の友」を引用して「田舎を東京化するが為に帰る勿れ、東京を田舎化する為に帰れよ」と書いている。しかしその田舎の在り方に郷友会の方々への視座は無いし、勿論移民まで考える故郷との距離感も違う。これまで民俗学が対象にした南島の神観念からも分離している。全く新たな意識空間を形成して九十年を経過する彼らにとつて「東京竹富郷友会という思想」こそが大切な拠所に違いない。

## 私は「フカに助けられた多良間真牛」の子孫

「東京竹富郷友会」に内在する口承も美に魅力にあふれているのであった。パソコン資料をたずさえて報告者となった竹富町黒島出身の大川安子氏は先祖伝承をめぐる現代発信をされた。「養女になる前は多良間安子です」と、漂流していたところ鱈に助けられて黒島に帰った、説話世界で名の知られた多良間真牛の子孫と語る。

しかし大川安子氏は東京に出るまで特に先祖伝承を人に語ることはなかった。彼女が「聴き耳の会」で真牛の伝えを口にした時、未来社『沖繩の民話』伊波南哲編「無人島に流された男」を頼りにして読むような感じで、聴き手の私は大いに不満であった。自分の先祖伝説を他人の書いた文章で表現するのは如何なものか？と、個人史の内発的な自己表現をお勧めした経緯がある。ところが驚いたことに、「上京して人に聞かれるまで真牛漂流の物語的世界についてあまり知らなかった。身内なのに伝説ストーリーも語るためのものは知らなかった。研究例会に向けて親族からの電話、パソコン情報などで聴き取りをしている。郷友会の人々は皆が承知しているので、特に話題にしたり、聞かれたことも無い」との返事があり、伝説をめぐる地元と外部の温度差を知るところとなった。しかし彼女は「父が絵師に伝来の掛け軸摸写を依頼していた場面、真牛が無人島から黒島に帰って来たという日、掛け軸の前で線香を手向けていた父の後ろ姿、

真牛到着の地と彫った手作の碑を、保理村の海岸にセメントで宍メートルほどの山を作り上げニンガイ（祈念）をしていた父の姿を思い出します。神司にはアームリヤーのお祖母さんと呼んでいました。」と当事者らしい記憶を語っている。彼女の父親の手元には漂流図の掛け軸と「多良間真牛漂流記」があるが、大川安子氏にもそれらのコピーがある。漂流記は「石垣市登野城大川賢一氏依頼により昭和十六年喜舍場水詢謹書道元二十三年（天保十四年）発卯御問合控書ヨリ写スル」この文書は石垣市の文化財指定になっているという。

大川安子氏は賢一氏の娘としてコピーを持っていたが、それを読んで人に語った経緯はない。彼女にとつて都市の不思議は先祖伝承を、他者が興味を持って記録していることであった。『野村純一著作集5』に「民間説話総説―魚養事を巡って」がある。資料集『よなばるの民話』『西表・黒島・波照間伝説・むかし話琉球の伝承文化を歩く2』『ばかー島・八重山の民話』『八重山民俗誌』にも収載されている。時にルポ記事で伝承が扱われたが大川家が傷ついたこともあったという。例えば新川明著『新南島風土記』の記事に「漂流伝説の背景」というタイトルで「事実上、人頭税の重圧から逃げ出したために無人島か西表島の山奥へ逃れたのである。ところが寂しさに耐えられなくなって帰ってきた。正直に言えば首が飛ぶので鱈に助けられたことにしたのではないか」という記事がそれである。しかしまた都市の不思議は、ルポ記事で大川安子氏たちが傷ついた出来事が、世界的に伝承し

ている「魚の背に乗った男」説話の壮大な系譜の中に置き換える言説と出会うことも出来る。そしてまた、その系譜は『宇治拾遺物語』の「魚養事」以来A P通信のバヌアツ共和国ラジオ放送による「漂流した少年がエイの背に乗って、ニューカレドニアに上陸した」報道に至る虚と実の行き交う、長い伝承生命を保つものという口承文芸学会情報を獲得するところとなる。それらから言えればルポ記事は明らかに狭小な見地からの説明に過ぎないと、彼女は納得するに違いない。大川氏のコピー「多良間真牛漂流記」を私は平成二六年度広域科学教科教育学研究経費報告書『平成二六年度国際化時代を視野に入れた文化と教育に関する総合的研究』（研究代表者 石井正己東京学芸大学教授）の中に「国境を越える東アジア―海の想像力」資料として全文面と掛け軸一



掛軸の一部（大川安子氏提供）

部写真を報告した。そこでは真牛の漂流についての役人取り調べでの弁明、島人たちが証明に力を尽くす様子を知るところである。海禁時代の漂流は『大黒屋光太夫史料集』にある通り「帰郷文書」に「先幸太夫事は江戸囚人同様に相成り」という処遇が待って居たからである。

身内の多良間真牛墓参り、ビジターセンターで係員に近年珍しいという真牛伝説を聞く友人、大川安子氏の元には発表に関わるパソコン情報が賑やかに届くそうだ。彼女のホームページを見て研究例会に來られた真牛研究者もおられた。

真牛の後裔として、大川安子氏が研究例会で披露したエピソードは面白かった。「もう二十年も前のことですが、いつも母の様に氣遣ってくれた石垣の姉に、上野のデパートから青い皮のハ

ンドバックを送りました。間もなく電話がありました『安子！あなた何考えているの？』厳しい口調です。そのバッグは鱗の皮だということです。まもなく、そっくり送り返されました。真牛の子孫が鱗の皮のうしろという姉の驚きも伝わって、私も押し入れにしまい込んでいましたが、今日を機に連れて来ようかと思えます。もう一つ失敗。仕事をしていた頃、仲間たちとうっ

かりフカヒレスープを食べました。本当にうっかり。鱈を食べると多良間真牛の子孫は頭の毛が全部抜け落ち、ツルツルになってしまふのです。」

大川安子氏は時間制限で想いの多くを尽くせなかった様子で、芸能「山崎ぬアブゼーマ」の時、『多良間真牛漂流記』を面の口にくわえて示し、会場を湧かせた。自家伝承への新たな覚醒を都市ではかったものらしい。

それにしても、都市とは何と可能性に満ちていることか。平成二十二年六月に、私は故長野隆之國學院大學准教授と瑞木書房の小林基裕氏の協力を得て、多良間真牛伝承を求めて黒島に行った。真牛が巨大魚の背に乗って帰ったという海を見るのが目的の全てであったが「百聞は一見に如かず」、透명한翠、緑、青、紺、碧、藍が耀いて、私の思索の糸を染め上げてしまった。海と動物と人の壮大なドラマはこの耀く世界があつて語り継がれる実感を深めたものであつた。ビクターセンターでは職員が昼休みらしく、人影も無くテープの南島歌謡を聴きながら並べられた資料を読んで帰った。

黒島で逢うことの叶わなかつた真牛の子孫には「東京竹富郷友会」で対面し、彼女は私が代表をつとめる「聴き耳の会」会員になられた。それこそが大川安子氏も口にする都市語りの不思議であらう。

## 民俗芸能はウチナーグチの容れもの

都市は文化的出会いの坩堝である。「口語り」を聴いた前新トヨ氏の三男前新康千代氏は三線を弾き竹富歌謡を歌い、三女の比嘉千都代氏は竹富舞踊を行つて、孫世代に竹富民俗文化の継承につとめておられた。研究例会では語りの縁で前新康千代研究会の三条、歌謡と花の会（黒木千鶴子代表）の竹富舞踊を体験させていただいた。狩俣恵一教授の親切な解説があり理解を深めた。三線奏者の前新康千代氏は小学校時代にウチナーグチ・シマクチを使つて先生に叱られ、方言札を掛けられた経験者である。沖縄本島で育つた大山保孝氏はシマクチを使つて先生にピンタを受けたと話している。厳しい方言否定の共通語教育を受けた昭和世代にとつて、竹富芸能はシマクチを知ることなしには行えない文化領域で、歌い踊る行為に基層文化への深い想いが重ねられるという。「南島歌謡の研究」の大著をもつ狩俣恵一教授は「民俗芸能はウチナーグチの容れ物」と紹介されて、表層的な矯正が及ばない領分の開示と理解しながら、久野マリ子教授の講演と連動させた。安里屋節、鳩間節、しょんかね、小浜節、まみどーま、山崎のあぶぜーま、でんさー節など、渋谷に居りながらウタキのタナドゥイの熱気呼び起こす民俗芸能の力を体験させて頂いた。しかしここではツカサもカミもウタキも関わらない、都市在住という核をもつ新たなエネルギー

の発露を認識しなければならぬ。それは学問が抽出した神觀念と共に意識させられた芸能とは明らかに異なる芸能そのものの姿として、私の眼前にあった。前新康千代氏たち皆は六十年代になってから本格的に三糸奏者となられたが、歌も含めて幼児期から耳に貯えたものが支えとなったという。三糸と歌謡は共にあるもので、一方だけではカタワと言われるそうである。特に「都市語り」のテーマとしては「鶯の鳥」の古層について学ぶところが大きかった。比嘉千都代氏はそれを母(前新トヨ氏)から教えられ、曲を聴くと身体がひとりりで動くという。現代竹富の「鶯の鳥」には既に失われた古層を現代の都市在住者が保持しているのである。それはピンタの痛みと共に封じたウチナーグチも同様であろう。胸深く収めた言葉の古層を三線に乗せて、心を込めて発信する愉しさ。その回路の豊かさに聴き手は圧倒されるのである。それは古謡にも言えるようで杉本信夫氏「竹富島の古謡アヨー、ユンタ、ジラバ」にも「八重山庶民の生活様式の変化によつて現在ではうたわれる場そのものが失われてきている」と危機感をつのらせて郷友会を訪ねて採集活動もなされた昭和五十年代の記録を残している。「これはもともとの共同体的意識の強さに加え、歴史的に圧迫差別されてきた人たちの、生活相互扶助の必要性にも起因しているが、そのなかでとくに結束のきずとなるものとして、郷土の島の歌や踊り、民俗芸能や行事の占める位置が大きい。すでに沖繩の離島では過疎化が進み、大半は島を出てしまっている(略)したがっ

て、島の古いうたを採集するにも、その伝承者を尋ねて島外を歩くということはいさばし起こりうる」とある。それからの時間的推移もあることから、この傾向は加速したとも考えられよう。しかしそれだけではない。「東京竹富郷友会」総会などには八重山出身者以外の、三線好きの東京人が三線の耳習いに来ている例や芸能愛好者が多数会場にいる。八重山芸能独自の美しさ、ウチナーグチ、ヤイマー文化の容れものとしての表現文化を大切にしたい人びとの姿もある。教育科学文化機関(ユネスコ)が消滅の危機にあると指摘した世界二千五百の言語に沖繩地方の言語が入っている。八重山方言は「島の次世代に伝承されているか」で「重大な危険」と位置図けられている。「郷友会という思想」が内包する文化は時代の進む中で、いよいよ意味深いものになるのではないか。

研究例会の終り頃に「聴き耳の会」萩原ゆう子氏が狩俣恵一教授の美しい声に反応して一曲をお願いした。即、前新康千代氏の三線で古謡「ピンニ木 アヨー」を弾き手の掛け合いもあって、何とも見事な美声で応えて下さった。

ピンニ木 む(生)ぬむいやよう シターリヨウー

川原ぬ端 たゆりどう

シターリヨウー

生いわーおーるー

ンチャラー

ふいようーホーナー

すんむとうきーぬー 生いやーよう シターリヨウー

木ぬばんだ たゆりどろ

シターリヨウ

生いやおーるー

ンチャラー

ふいようーホーナー

## 首都・東京の顔

方言札の瑕疵に傷つきながら、それでも政治・共通語の管理が及ばない領域で、皆が持ちこたえた竹富魂を眼前の事実とした古謡「ピンニ木アヨ」であった。その意味については「木の曲がり直せるが、人の曲がり直せない」と三線の前新康千代氏が解説して下さっている。狩俣恵一教授のお話にも竹富など沖繩全体に対する歴史的圧迫差別についての竹富人として直裁な指摘があった。共産党の徳田球一が潜入したと「東京竹富郷友会」が官憲から特別視された歴史についても知るところとなった。また座談会の話題にもあったように、都市・東京は竹富人にとって手ごわいものであった。よそものを受け入れないとは言われないが区別する意識。それは東京意識とも言えるものである。また、首都・都市の手強い顔であったと思われる。郷友会の存在が強固な結束を生み出す理由の一つにこの東京の手強さがある。山形県出身の私自身にとっても同じ手強さである。婚家の親戚は私を褒める言葉は唯一「田舎出の人・みたいでは無いじゃないの」であった。褒められて江戸っ子の舅は嬉しそうな顔をしていた。最後に上京組を受け入れ難いという都市・東京・首都の意識について考えてみたい。

東京意識とも言えるものについては、その端緒を幸田露伴の世界に見ることが出来る。『露伴全集』第二十七巻には明治三十二年「新小説」に書かれた「一国の首都」が収められている。「一国の首都は譬へば一人の頭部の如し」からはじまる東京に昔から居る江戸っ子露伴の大評論である。「江戸の東京となりて経たる年数の今は少からずなり、明治も三十二年となりぬ。既に江戸の破壊者となつて而して東京の建設者たる衝に当りたりし薩長土肥及西南地方の人士、京都の搢紳、新商賈等は、前には羈旅の客たるが如き情状を為なしたりしも今は純然土着の士民となりぬ。」江戸を破壊した薩摩長州の者たちが帝都創生に関わる現実への苦洪が行間から零れ落ちる。が、「今や西南その他各地方の人士の維新以降東京に任せるものは既に真の東京の民たること、江戸以来東京に住せる者の東京の民たると殆ど異なることなし」と記す。露伴は首都としての住居、道路、公園、水道など明治のインフラのあるべき姿を論じた。子どもの生育に幼稚園をとも薦める。ここでも地方から来た者への江戸人の蔑視が透いてみえる。「善良なる家庭の小児の不良なる傾向を有するに至るは、大抵心なき老婆乃至少女等が其鄙しき経歴性情より発する挙動言笑の伝染に基因し」「下劣の談話、卑猥の唱歌、放肆なる挙動によつて」乳母子守が子どもに悪影響を与える危

惧を記す。本論文は後半にユダとタルマの古譚から始まる売淫娼妓の歴史を扱った故に「明治文学の奇書」と読まれ、あるいは前田愛「都市空間のなかの文学」で「屈指の奇文」と言われてしまう。しかし「真に都思ふの人士のその処を得てその語を發するを信じ」政治行政については含みをもたせている。私がこの難しい大評論に興味を持つのは「往時の江戸兎が江戸を愛したる如き、燃ゆるが如き意気情熱を以て今の市民は我が東京を愛せるや、否や」という東京、更に露伴が「世界の東京たらしむべし」と矜持を示す首都・東京が敢然として存在した事実、すなわち関東大震災以前の東京人について知る手掛かりとして、露伴の言説は傾聴すべきというわけである。この露伴の東京について川村二郎が「東京人」で「文学的な屈折や陰影の乏しいのが不満」と書き「この文章を好まない」と書いているが、これは露伴が文人と言うよりも薩摩長州の者に破壊された江戸の人間としての言葉、其の後の星亨による政治的東京改革「都市懇話会」をめざし集まってきた、地方人による変化に対して江戸の人間として憤懣やるかたない想い、それを書かざるを得ない言葉、文学者を度外視した東京人の言説と読む事が出来る。その上京組を壮士と呼んでいるが、遊び人と並べた嫌悪感には注目したい。

「遊び人は江戸の遺物にして、壮士は明治の産物なるが、共に都民にとりて感謝すべくもあらざるものたり」「壮士に至っては平日は良民に対して何らの痛痒を与へずといへども、一朝各種

の議員選挙等の事あるに及んでは種々の影響を良民に与へ、為に小胆なる良民をして各種の選挙権の自己に付属せるを厭ひ自ら棄権者たるを智なりとするの傾向あるに居たらしめ」

「歳月は無言の師」江戸の想いと東京の現実の間で『一国の首都』は明治の奇書として遇されていたが、露伴の思想に通底するものは現在の下町にも残っているかも知れない。

「都市語り」をテーマ化し、都市の内質について思考する時には現在も露伴の江戸意識を思わせる無形空間も無いとは言えない。

『中央区の昔を語る』シリーズには住民の言葉による心意がたどられる。十一号は昔花街人形町・堀留町であるが、舅が生まれ育ち、職業人として生きた地域として読んだ。私において知ることのできる江戸東京は婚家・舅の言葉に尽きるからである。舅の育つ明治、大正時代の語りと言えば音曲を伴う浄瑠璃や義太夫で、ほとんど昔話の概念は子供向けのものである。三線好きの前に書いたが「下町はお嫁入りに三味線を持って行くのよ」と、伯母は眼で私の三味線を探す様子、そういえば叔母たちも夫の従姉妹も、十番目の叔父夫婦も三味線を弾いた。

そのむかし・東京の「語り」は義太夫・浄瑠璃

明治三十八年東京日本橋堀留置職の家に生まれた舅は、親の指示で十五歳高等小学校卒業と同時に町内の呉服問屋へ奉公した。住み込みの小僧時代は休みといえは芝居小屋に語りを聴き

に行つた。ある日、女太夫に「イヨッ○○ちゃん」と声を掛けるところ、来合わせた大番頭に見つかり、次の休みは出番差し止めをくつた。この話は稲荷町の伯母さん・舅の長姉が我が家に泊まる日には一層楽しいものになる。当時東京下町で「語り」といえば義太夫、浄瑠璃を指すものであつたそうで、お店の旦那衆は師匠について習い覚えた。伯母の幼い頃は近所の金持ち年寄りが菓子を振舞つて、泣いたり笑つたり唸つたりの大熱演を聞かせた。呉服問屋の奥に入れる数少ない機会なので、子ども達は上等菓子の魅力もあつて我慢して聴いていたが次第に面白くなつた。伯母は「でのふしはあしとやかあにすべてとあるはあこれかあたあり〜」呪文のような「語り」の心得とやらを唱えていた。琉球の月琴に一本糸を足した三糸のことや、浄瑠璃のゆかり「浄瑠璃姫」物語を昔話風に語る。「これを知らなかつたら江戸者じゃないのよ」とも言う。絵草子のような漫画風な習い本があり子守をしながら覚えた。

舅は小僧から番頭になつてお客の応対もするようになったが、番頭時代の失敗談も浄瑠璃に関わつていた。仙台のお得意さんの一人は浄瑠璃を聞かせてから仕入れに入つた。折々浄瑠璃を披露したが或る日、袴や見台など先に送つてきた。饅頭がたくさん入つていたので、舅たち番頭は皆に配つて食べてしまつた。当日、つらつらおもんみるにすめるものはたなびきのぼりててんとなる、にごれるものはくだりてちとなる〜と始まつた時、聴き手に配り物が無いと大騒ぎになつた次第というが、こ

の失敗談に営業の爲にも浄瑠璃語りを聴くことがあつた時代を知るところである。

江戸が東京となつてからの浄瑠璃熱については天保十年の原稿を弘化四年に刊行した斎藤月琴「聲曲類算」を、著者自らが明治二十二年に増補出版したことで知られるところである。本書には「和漢三才図會」が引用されているが、伯母の語る「浄瑠璃姫」と同様の伝承も収めている。曲を離れて語り言葉の解放が子ども達に新たな「語り」として届いているようである。

『窓のすさみ』に「むかし古戯のおもかげを移して、天満といふ者、説教と名つけてうたひしとそ。舞といふ俗曲ありしか、それを轉して俚俗の語をもつて作りしと見ゆ。予か幼年の頃迄、かたはしを覺へたものありしか、いつとなく絶ぬ。また薩摩浄運といふもの、これを變して、世俗の喜ぶ様に文句をつくり、一曲を始めしと云々」とあるが、『群書一覽』で目録を見るとそれら「語り」の内容は、昔話や伝説の「語り」における現在にとつて実に刺激的である。

「舞の本」研究では扱われているものの、中古の古雅が現代語として未だその消長を失わない口承の楽しさを見逃してはならない。「堀川夜討・あつもり・ゆりわか大臣・文覺・なすの興一・伏見ときは等」「文正草子・御曹司島わたり・酒頭童子・鉢かつき・梵天国・物艸太郎・子敦盛等」の浄瑠璃が行われている。下谷稲荷町で煙草雜貨屋を営んでいた伯母は下谷住まいの画家長谷川堤宗一門下の絵入り本・今の漫画本のような「なす

の興」「ものぐさ太郎」「ゆりわか」など浄瑠璃語りの本があり、昭和時代も大津絵などと並べて自分の店で売っていた。日本橋山代屋などから出版されていた本も持っていたが、戦争時代の疎開で失ってしまったらしい。

黒船に畳を敷いたという舅の生家は江戸時代からの畳職であった。舅は十人姉弟の長男であったが、幼児体験の明治時代、芸事は熱心で母親は花柳流踊りの名取で、子ども達の習いごとに熱心であった。すぐ近くに芝居小屋があったが一幕だけ覗くことは許された。すぐ隣り、裏、万橋の通りに銭湯楽屋湯があった。役者が白粉を落としに楽屋湯へきた。芝居のはねる頃に行き、外座の人や役者の声を聞くのも楽しみの一つであったという。舅の幼児期は畳職人が大勢いたが、夕刻楽屋湯に行き、寄席で覚えた落語やお伽琵琶の桃太郎や金時を口三味糸で聞いたものという。自然に子ども達も耳に挟んだ。「江戸もんは言葉遊びが好き」という。

東京はよそ者は受け入れ難いと、先に書いたことに関わって、もう一つの婚家の表情を知るところとなった。

舅の父親は聲であった。「都市懇話会」の星享の信奉者で、幸田露伴が壮士と呼んだ上京組の政治運動家であった。星享は壮士を定業につかせ、生活者とし商工業者の政治的活性化をはかる方針を計画したと御厨貴は『東京』で分析するが、舅の父も福井から上京後、不定住を制御され、壮士たちの常として電車の車掌、運転手、警官などを経験して世話する人があって日本橋「豊源」

に婚入りした。舅の父親は「政友会」で星享暗殺後も政治運動は続けたようで「豊源」に三木武吉が来て子守をしていたとか、家を密偵に見張られたとか、舅や伯母に共通の思い出話がある。女子教育家で『家庭』を執筆をした下田歌子の人気が高く、舅の父は大の下田歌子ファンであった。六番目に生まれた叔母は歌子と名付けられた。下田歌子は「婦人日本一の月給取り」として人気であった。当時五千円の月給と騒がれたものという。「華族女学校学監で年俸二千四百円、問宮、常宮両殿下養育係及び御歌所参候で年二千円、他人名事典に著家と記された通り諸種の原稿料年六百元ぐらい」（明治三十二年二月十五日新聞・日本）とあることから風評が推し量られる。舅と伯母は「豊源」には似合わない下田歌子の何とかという厚ぼったいハイカラな書物があったと記憶していた。読んだ記憶はないが威張ってはかりいる父親に似合わないと思つて眺めていたそうである。壮士の時代、アメリカ人水夫と仲良くなり舅の父は横浜からアメリカ通いの船に潜りこみ、パスポートが無いので桑港から戻つたという武勇伝がある。西洋かぶれでもあったので『欧米の科学的家庭経営』の本を求めたのであろうか。舅の父親は歌子叔母に特別な想いもあつたらしく、相森神社の総代をつとめた頃、歌子叔母が男装でお神輿をかつぐことを許可したという。大正時代に入り舅の父親は大きな食卓を作つて茶の間に置いた。食卓の裏に大正四年野村氏と大きく書いてあつた。奉公人にも函膳を止めた。重信彦彦氏の著作『お話と家庭の近代』の「一家団欒」の挿絵のような食卓であつた。

アメリカ風に新しい時代の生き方を模索したものであろうか。壮士の行く末にもよそ者として江戸の風を生きる苦勞を超ハイカラで圧倒したものかも知れない。

## まとめ 都市語りの可能性

ここまでかなり自己的な記憶装置を可動させて、婚家という私の「都市・首都・東京」についてについて記してみた。それは幼い頃から私が予想していた新生日本の東京とはかなり違うものであった。「語り」も「はなし」も幸田露伴的な他者を受け入れ難そうな世界が透いて見えるようである。江戸の名残と外来の文化が一つ家で混同していたようである。終戦後「東京竹富郷友会」世代の方々と私には共通する東京認識がある。良くも悪くも東京発信の戦後民主主義情報である。昭和二十年八月三十日午後二時五分、ダグラス・マッカーサー元帥が連合国最高司令官として愛機C五四パターン号で海軍厚木基地飛行場に降り立った写真以来、銀座の交差点で交通整理をする日米のお巡りさんの写真など、すっかり変わった新生日本の首都というイメージが強く意識化されていた。誰から聞いたものかマッカーサーのメガネはレーバンのサングラスというものだとか、手にするのはコーンパイプだったとか、拳銃も防弾服も着ていない即ち寸鉄を帯びずタラップを降りた。とか、新聞や映画ニュースなど媒体で国民学校低学年生にも大人と同じ情報が伝わって

いた。これら敗け情報が全国民に開示される終戦後はすごいであった。一度灰燼に帰した東京の廃墟のような中に闇市が立ち、再生した東京が如何にも従来の姑息な軍国主義の力学を崩した新しい都市として輝くものに感じられたのであった。個人の自由・基本的人権・男女平等・教育の機会均等・戦争放棄の新憲法。八歳頃から教え込まれた戦後の所謂アメリカ民主主義教育発信地の東京についての刷り込みは揺るぎがなく、旧式墨塗り教科書との潔い断絶などがある。それだからこそ多数上京組は戦争時代の失敗を承知するからこそ、戦後の新しい東京を何処かで信用して在住出来たのである。三線奏者の前新康千代氏はブラジル移民をしようと東京に出て来たが、首都圏で仕事をするうち、移民のことは忘れたという。「東京郷友会」という思想が戦後民主主義を反映させて、新たな地平を拓いていった様子も知るところである。そこでのウチナグチの容れもの歌謡・語り・舞踊などは思想表現文化として、文化は今、此処に在り自己の拠つてたつところのものとして存在する。

平成二十七年九月二十四日「朝日新聞」文化・文芸欄には「土地の言葉失わせない」「消滅危機」「アイヌ語・沖縄など七方言」の見出しで「危機的な状況にある言葉・方言サミット」が文化庁などの主催で行われたと報じている。身を以てウチナグチの「方言札」失敗を認識する「東京竹富郷友会」にこそ、向後における「都市語りの可能性」を期待できると言えよう。

(のむら・けいこ／國學院大學栃木短期大学講師)